共十二

十二源氏袖鏡

二

源氏袖鏡第二

巻　うつせみ

同　夕がほ

三　わかむらさき

三ノ目

石黒文庫

源氏

蜻蛉

うけもちの人はかたちつきたれば
もてつきなどもおとりまさりの小君はいま一段
たをれとかてらひまふあひまとしつきの
やうもなけれども人もくれちゝんはかえて
あるうちんとおもひたりきのゆふ間よりてあと
まつく人もくるに女ちやうちやうやう
のあたりくしき海さきれよ小君ゝ車にのり
かゝてまつりて御ものいみちた

豊安文庫蔵

こくし月行てうへ道わをこそのまゝ見ん
ばくゝ人ゝあるたゝをもわてゝ小君ゝうかう
しをたくきのゝ志りて因へいわぬゝ志ちふ
やう　こたちといふ女房こゝろいきのゝ丸いうと
海ゝ毋の袖せゝれうふゆく碁をうちゝふ
こいふと源氏ゆしくゝ物りめてかうしと
みをとのあひゝよ入くゝいまんゝ出ちう
とゝてゝゝゝ出ゝらたそゝゝ人やはゝろ
ふけゝう人ゝんとゝまりはゝあゝ先物へは
うゝあやの袖ゝへかゝねゝありゝゝあゝん

うへよきて町らつきはうやゝもるゝと物
ひまゝゝ海てゝ物をれきゝゝられゝも
ゝあゝんあゝん人とみをもつきゝやをくゝ
をいうひゝくゝしあり今一人いゝもき
にくゝ物をゝこの志ゝうきゝ物のひゝへよゝ
のゝ海乃ゝうひまゆいゝゝもゝあゝふ
すゝけうゝくなゝゝてゝ也ゝろはゝ
はふとゝくゝて町らつまゝをゝつき物あき
やたかゝこのゝゝあゝのゝゝあゝをゝゝへく
物ちけゝゝふをゝくみ也参ゝちゝゝもち

さすがにうけはいかゝ
なへやうこゝはいとゝ
ものうなりぬるかとて
なりまこのところ〳〵
うゝてうゝたるみそ
のゆきさもなとゝ
ゆの松きさいくゝ
きくこゝ三年三
まれも孫あるやう
ゝ蜂とむすめと心
の萩とゝ人なり小君源氏をこゝ
ゝなりきゝたりゝ
ゝそれをもいやゝ
うつきんをもくゝ
遠も九條のうちへ
まきて物ゝこゝ
なへゝゝゝとき
わきてもゝゝ
ものゝ源氏入
ゝ蜂とゝ

へた月ばかりもものくるいまて医
いまてまてとはりまつ　あやしく
よく御りやうく月ぬ
りはくあるぬ人なりと
ちうちゆしはもそめ伊んもなくあ
とハちひあうんかうまきまうちうち
たうとなりけくしくかうしをれて
くのかふとてかのへはぬきあさうこうち
きはうてゆりはぬまうあはたうあ
かるはけきまうんのかをのの秋
あくあきたまいくはすをいうさめ

て御ようないのやうに源氏
うつせみの身ばかりくるまのりたまふと
人々のなつかしがりいとかなしう
しく人香ばかりをもちてなつかし
見ぬ所ゆかしきに例のあの弟君
いみじくあはれなりけりとおもひ
出でたまふかの宿をとうちとけ
よりて見ぬかたちなくなつかしの風
もいと艶にうちとけて山
よりなりけるこゝろ也

うけをこれ[illegible]をく[illegible]のまうこれてこの
ひくよりて神なるをうれしけりうたてきをを
いをおりあまれこれ[illegible]ゆるれてやなとこれ[illegible]
をう沢引寄 [illegible]山伊勢ものあまれを
て衣をうれしうとへやうるむ

蓬 夕顔

六条わたりの院思ひやりきこえ給ふ源氏の御
伯父 [illegible]なれ給ひしうは息所ひめ
うの一人もたりてまうりのみして十九よりは
ひとりをみまうをを六条のうへを所
とり [illegible]源氏きのひくにおもひさし
給をいりそのつそなる又条わたりなる御は
ものと大殿とそこ [illegible]
てひてあまに [illegible]をたてをおりまう
たうれ何なりよ [illegible]

なそくもつてけなり小家とこのもかのまろ
とんわてはよ　この和歌の面や　引舟　浦ぐねの乃
このをかまもようけハあまと君うみたはの海も
うけハ今　ひさつなる家よりまとといふの
あさくしくこゝろしすれもこゝろくすし
をなりよりきひさいつこのをれけあまこ
君をのくもひくくしうぬをもみの海
をいこゝかくと地ハ也ハあれらてふも
地ハまも引舟　あまいいこゝさてる
うをん物ごまをそ宿とさこゝろさりけ

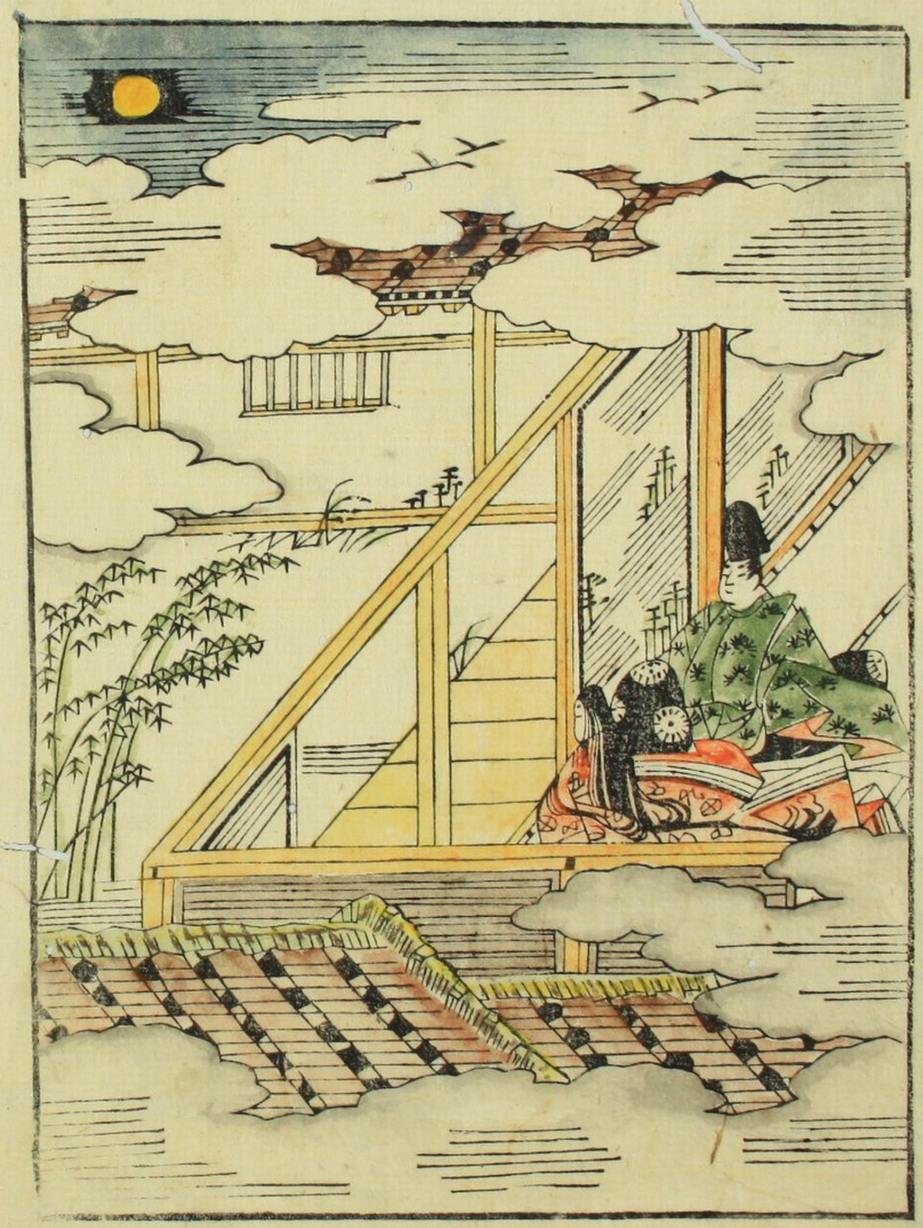
ふ河地よ　夜をそそりにいてあをまこうこのふ
ちよけふをひうれるたこゝろき花はとのれひ
こゝろこのまもひうをりをうこ人よ物
ゆとはをきみあふをみをいんうけはそ
このこゝろくさけうをちん夕うれとゆはとよく
名ハ人めきてかくあやしき海よのこゝ紅
ときこゆをこくうちゆの花はちきあやひと
枝地あてまの是とのはり屋戸谷は黄
なうすしはれをん海ゆやふこゝろ
ハ出をて折まひくこゝろあをはいこゝ

かうをきいたんよりせく いとうこうこうハ
たさねりや
枝もなりけりき花なりの花よりさてまいり
せうといふ源氏ハ法めしとのうてゆ和うり
あわてさうぬるとあるに 世中よりう
ぬるうれのなくもうれちよりいのるへ乃よりめ
出のふとて推えんよりこうくりてうあふ
きはらんとれハ人よりうめくうう
うにあのあめく
ふあくにうれうとて乃白寿よりうへ
うなうれるとうきうりさいのれよりへを
てあんのふくきこうるもあくうをれかう
うそはうるうをもうあぬはんなうれはを
ハ法たううみよあぬさ海ふ去へ新て
よわてうそれうもあたうれなら乃く
こつう花の夕ハをつうみをいたんしてつうハ
ををのちこれうれよりはこうりの歌あうをと
とをせ新へやうめいのをけなうりあ歌う
ゆうれくこハ新中一海うりて女とれ文つへ
人をきりをれ伊ゆ戸はやうめいのをけ源
氏三ケの大事ハを一とうりをれう惟光

にあんないみを給へたくりて凡うかてゝ
をタくれ宿の中垣乃うへいまみとゝ也給うく
かまへをあ給女乃さ後あきうきまそあへの
小屋いうれるはもうーさりうかそくきうく
なくいあるぬ人のたくらうけよたをわうあう
とあそれよ凡ふ大夜の姫君六条のうやす
不なうへもれくまなわてをけ人よ御ん
ときまあ給八月十ふ乗もけやとにときうあり
六条のうやを不のはりたに中ねの君とふ
女房ありを時源氏うやを不の給うきう

ゝあ給あるうらうのうへ給をりを氏中将
をりハ月をりあうふをあんをこの給りよ
あるうをあるあやたにあきゆるうあ給き
あ給やうみあを氏尺をりあ給てをみの後
のかうらんよをりのきをへ給て源氏
さく花ようつをふ名ハつをもあて
うきと紅のあさうかいうをへをきて
うをへ給へを中将の給りていをあく
給ふ雪のをれまもあぬ宮ゆをて花
にん後をあねをうをとうやを不のはうう

中ごろ源氏ものがたりてはやくしるくかの
ものがたりの人物ものがたりかまい
ふ物ものがたりのうるわしきはあるきらくなるふるよ
おのの物がたりをきくとなりてこれのみを
物がたりをかうしてのちとなりのく
きくはゆゆしきものあるべしとそはは
さらぬ物がたりをみまくおもはるれいふき
はるがたりをきくあるべんくて
のこいをうらとて在をとるよはひ



ものはてはあけくれうたかたのよのなかのさま
いろいろにうつりかはるをみるにつけてもいとあはれなり
しらやあんるもたらいさいのすせみなかさ
なるかのきまてはへはいせのことはいふもさらなりと
あもれもあはれなる源氏
うたをくちすさむにつけてもこんせしゆ
めもきのふけふとおもふへきそこんせし
さまの世はちまちまちなるうきにゆ
をふるひくたのことくさまなふしの節とふ
あへはあるをいさちはいてあつまりすあるをさ

そ何りの院とぞうの院うせられ
大臣の位とりいみしくあまたいて新の
思ふ事ありたりし女はいと物おぼしとは思
いとゆゑ者もあらけまし源氏
いみじへもくやくの人のまいりんわまさて
ぬるのあれみち女君
山乃端のかすみうすき月はうすものう
にくくけやゆえうんかうんよ海車ひさけ
しかまりとふりて立ぬり始てはよ
ろづうちうけて世間のんの御ゆしの御との

ゆゑ殿ひきうつく今そ源氏とうれ給ふ
八月十ろたり源氏
夕霧よりもうく花はあきこのたまりよ
ゆうえうとうたうれ雲のゆきやいふと
ゆきまへうちめかれこせく女
ゆうりありとみしたくけうは雲はあり
風時のうめたりかうしうく始て
ていとのあまりまうせうなうなうれしくう
こけてゆき中川と歌始りかのすす間雲
ゆうりの中川をたくねも見てうう

なとのつきやとまいをこうろ松ゝ源
氏すうゐゑもんふ蛍小海松くこい
とおりまを明ゝ女めくいゆやうをのれいと
めくうとゝ云ひきゐゆるをハあつてもあほ
ておく詠ゝ人をめておくしゝろくゝ
てゆけゝをたゝ人をうきゐこうんとを物
ゐうくゝ山らてゝ尺あけめ人ゝのあふ
らもきしにゝりゝくつくゝ物ゝて人
をめきんとてゝゝ式ゝくゝ山のこのゝふ
ゐもうゝきう侍女君物ゝおゝれていゝ海

小きんとあせもゝゝにゝれゝうゝんと
めゝ生しゝゝ女房こゝをもおゝ海しゝ
ゝれをゝゐゐてなゝ太刀をゝきぬき
ゐてゝゝくめゝむとそれ戸つゝゐのの
妻戸より出ゐくめ侍ゝくゝておま
ゝゝゝおくまてまゐをいんもはゝ
うゝしくあしをこハつれ人をれなゝ
ゐゐてうゝちけてゝねゝゐ畑ゝハをそゝゐ
へくゝいゝゝゝゝゐへゝ女君いまゝ者く
ゝよくゝと申ゝ乃者ゝ也いとかよゝくて

ひとりうら紙のうへにかんつるものとおぼしきをよせん
るをりからうしてうちとけてまいりてうらーは
義にかんしてし女面もけよりもてなしてゆるせぬ
もうしあはるるをふこうのうちうちにまかせけるとあ
さゆうきれともえんぴんいるなわめろそと
ゆるをはんいまいよりあれうへもうれはは
まそはというそれもちてわうえやいまおはは
へ部よりみしきめふみをまいそとのはへを
ひえそてけまもて宮ちいもけうとく成
ぬ人うちれ角さうちのとのゆりまよ

も今夜はけれまいりつまてくしくるう
て火あやうしといふ乗なふもなわめん
と思ひゆるよ風あるくしく吹ておかとの
あるハかのたまてゆりあ風のこと
こうりこ風くしきよ和乃あるとを思
ゆとしてうしろうろ原ゆうちを面夜
の鬼れなふうのおくをおいやうきん
ためとゆりいそてきまもむまくな
そてしまのこ為なくくしとうこん
つなくをせいまふむしり負信乙乗よ入

て南殿を通まゐる御剱の石つきとゝ
へゝるをさゝり給へハ色乃あるまゝつめの刀
のゝゝ也是とおぼ[illegible]ゆゝくゆるさすハあり[illegible]
ゝんとて太刀とゝめき給へとうしとゝの角
へ海もゝゝとゝを大[illegible]焼よあゝ惟光[illegible]ふ
はゝつゝれとあゝりゝさめぬものとゝて
かゝこゝゝあゝ孫乗のあゝふ久しきゝと
せをとゝく決やゝり給引奇[illegible]ゝまハゝと
きゝ給をゝゝてもゝゝハ海よゝ久しゝゝ
ゝゝ松のゝゝきゝ本ゝ[illegible]ゝきこゝて寅ゝ

あゝ名れゝこゝゝゝゝきゝゝもゝてゝゝハこれ
ゝゝとゝゝあつめをこゝくゝゝそゝきふなと
ゝくゝゝれきやゝゝをハゝりつゝそゝとゝやゝさ
もやんゝゝゝ乃ゝゝゝゝにきこゆ
ゝゝゝてこゝこゝゝまれゝゝいまて
ゝゝよゝとあやゝきゝとのゝゝ成あき海わ
ゝゝもあゝゝてゝん[illegible]ゝみのゝゝ所
ゝゝたてさせんとゝあゝやゝ抽せゝゝ
ゝいとの給 ことゝゝ のゝゝゝゝ 以人まゝゝ海よ
ゝさ成のゝ給てゝゝきゝも給ゝゝ

なき跡はあはき海をあはれならぬなし　かく
かんそまつそこれらをの道もよろしとおほき
おあしや里は嶋山への取わきめつられ
此事まも侍らずとて仰くも人はかるゝこと
かくさんうはやうる海ろへきとておあわせて
東山よりまし跡むかるおまのこなれまくそて
侍り西へ道なきんと申了す　ごうかれは
わうらうるもまう川のうつはらしまておかいは
なりなさうは源氏は行るまて二条の院
へおりませとて此人を車よのまんとて　き

さうよもえせ身ゑうはむしろよなそしくて女
たるふかきはこられわくめもられくお浄さらう
えんを車よはそへく惟光（これみつ）はらうわさあけ
おろして梅しむとそりとやふ　京は二条
の院よたちしましつきそしきをさくへ御浄
また屋るるとおけ道はなきとのりそひていか
さわつしんいきむなてん時つくしとやおもりんと
仏南ひの中まもおかさらかくいふる十七日
此おし身なわまられよえんりし山へ御する
にくおもしさし　はもとりし火ぎりそむけて

うちあるうちにうちぬきうちわ
れるみのはそのかきはわるをいうる
むすめ髪わらと歩して我よと家
をとりきせまへとたれこうを
はいさこ条院へとのはへといけるくりる
時をるれそまつきわ人をられて河
くへ海わはんあををりよたらいてう
せうんとせはせ中の別とはのかはー
りぬはきわさ也さいのてあてあをとの
ものまくとうくのはは陸奥はたは

まれもりてわたうちてはこの
狩にくはるまわすてりおちていみくはは
まこれこれくまくいして信水の親をと
縁をしわは中もをけを会しはいく
をくたらけらをつて二条院よ海をいて
接いてくをやこまみ地なくるきりは
をおりうこさやうまりをくへとあはは
のはをまてやうくなり月廿日あまりよ
そををこわはくは縁をうちよるあはて源氏
見し人の煙をそれとなる山をもゆへ

のろもむつまじきふれをはりよせく
つりひるとちらく結ひてつひはいまし
結ひくもいるる人のしもめをとくたく
さいまいこ位の中将とせ人のなせ
頭の中ねりもやうもわみてまいりまと
こはふるうわせはかりあ和の品ひさめ
になくしことかわし人よと地ひあハ
するよ一しかあもりあきはきりてうのゆさ
なきんをいいやうもかこつけて歌よえ
させよとあくそくしまふはせ見はよむろ

うりはをもなりかのうりをゆて歌を添
とをねをもなりとそ和るよいの
はもわいいうくとりあつくて
師もわるくうにまんし
うりをみの世いうきあもちわにをきま
ものふよかう命よりうつせとハ侍るの
也人をてくあとゆうかのむをめ
まむうはもわうあ一枝ものの侍
はんしくあはハ文をたつくを拾も

ねをおほみそぎ　あまのやうの萩をつけく
　　かりなるも形もれ萩をむもをすもの
のかもとに行のようけまし　あハ心うしとこい
きこゆ是とは思ひ　いるのもれむもめ
　　はのめうを風よつけくもをる萩乃ふく
を雲をむをもうをまて　けふもゆへよ
あと形をの萩といふ夕　就の四十九日に
えの山法花堂に　にく推をの兄れあしや
里うけ始ものたうとくしりり　綱結り
をうらまふしやうをれ中にを海のこと

を見よせて源氏
　　なくくもをハ
世よりうけてうへき　伊与れうを国へを源を
女房もをくををとして源氏をたむけ
心をにくあつまをを始くつへうを　熱
きてをり　うつをみのをへいをのをれ文あり
かりをうを始りをもめをのこうををいをを
くしを文猿のををやうをくをつうを源
　　あまくくの明ををををををををを
す神乃ををふをを　れ明をを輝

せこのねもをちこちなる夜ゝ人を城
みても孫はなれなりもふる雲の立百なる
けるもをくうらはかなる宮に住る人下
ふるとも夕うかのうるさ城もあはて源氏
ものもかはの蓋ふいつも人しれぬはねこい
ハ家ゝ有りと蓋ものんゝ

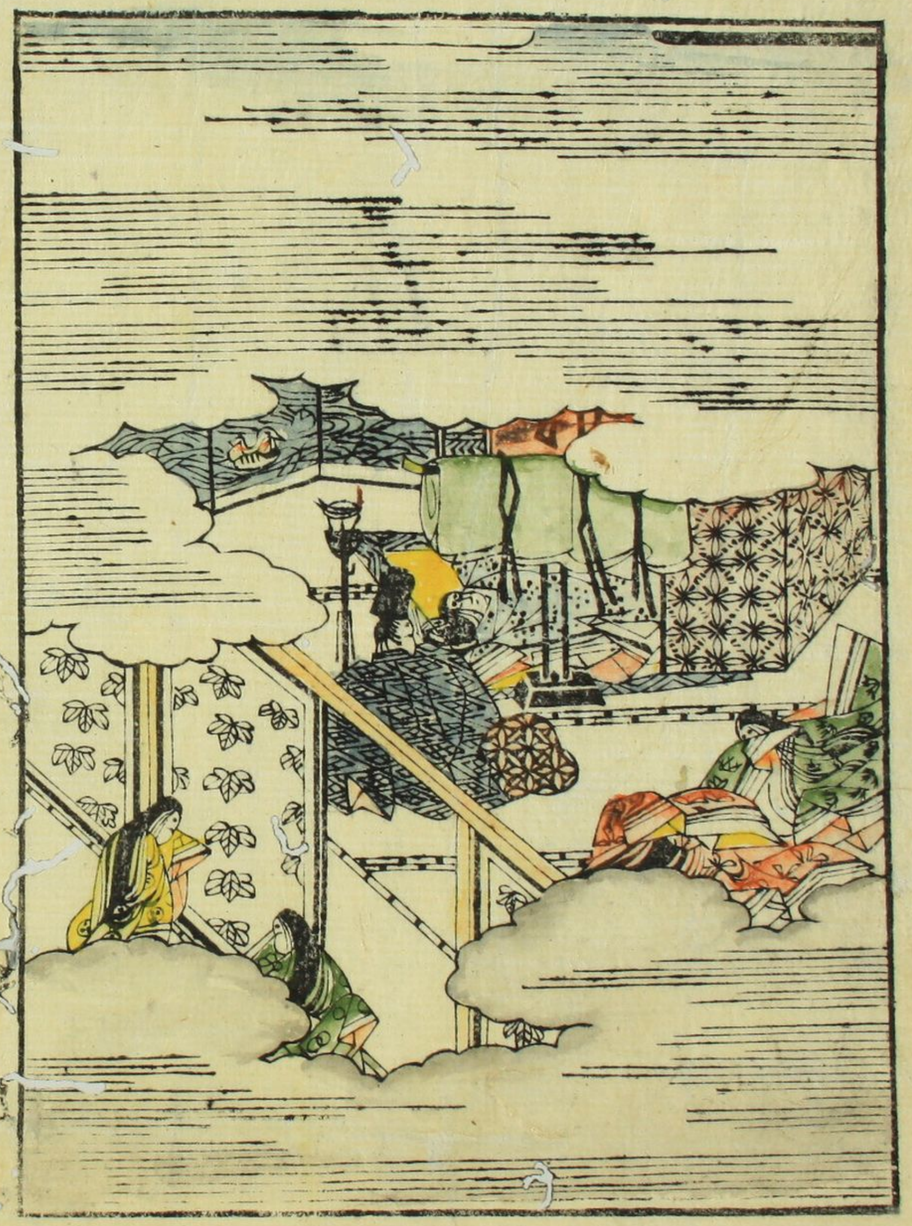
三月雲

源氏ものハやとゝ上ゝ拾て食ゝ人ゝ
まわある人ゝやう小山乃なふう寺とゝ
所ゝ屋ゝ海ゝ人ハ山ゝ里ゝ住ゝ
ものゝ所ゝ人ハうゝ住ゝをゝくゝ
ゝゝゝさ世ゝなゝとゝ行ゝ所ゝふゝ
れゝ花ゝくゝまゝてゝ山ゝの戸ゝもゝえゝそ
住ゝぬゝゝゝれハ無ゝくゝかゝゝへゝおゝ
まゝ山ゝくゝ入ゝそゝおゝゝまゝに霞ん
たゝもゝれもゝたゝくゝ毎ゝ三月ゝゝゝ

ゆきかり京の花ハこれちわぬをゆ乃
ゆ乃ハまさきさわまて　いみしく雪もしら雪
寺のさ海もいとおそれ也　嵐たくまぬき
雲はゆきまさ　雪ハゆきわ乃のちり
てれうちまわさうへき　ぬはけりてをを
ふてまるふその日ハおうせ　ぬをと和
をうわハさまを　ゆくれ　ゆつたうちハ
とまわて出　ぬへとけりをせ　ぬまち
ゆふつ　くにくちゆへ乃ゆよ　ゆくゆの
ゆうぬ　ゆ　ゆうふかをみけうを

四方の木を海うこえをうをうをわけれ
除ちと絵うをうをれ　四ちぬくさめをうん
をて沖ものへゆふ乃国の名所をも又
あ乃山をふうれ　けをいくよう
をまをうをうを　はうを海のあ乃う
うを何　ゆうをまくまハうけ　と兵海
の場をを見　ますゆとゆ　ゆ　ゆ
　　いくゆ　ゆ　ゆ
　　ゆ　ゆ
ゆうを　ゆうれむを　ゆをゆつをうを
ちもうを海を　ゆりゆをわれゆく

中をにたる也又なふしの俤なとあも
行しの事なれる也なをさし時代を
あらはさしとくやうよつくりくんと如也て
ら行りの下に小巣垣ゆへさ屋さし
なてたるあるをもまねしうそ此儒拙
のことせこもれる所なるを源氏うれう
つりは仕をそ地わをてゐまみ拙へハゆへく
しきあま君又地をれくしさ也房をを
地かくあり行きる紀子をも本入くあふ
中にすつりあたる姫君のうをあふさを



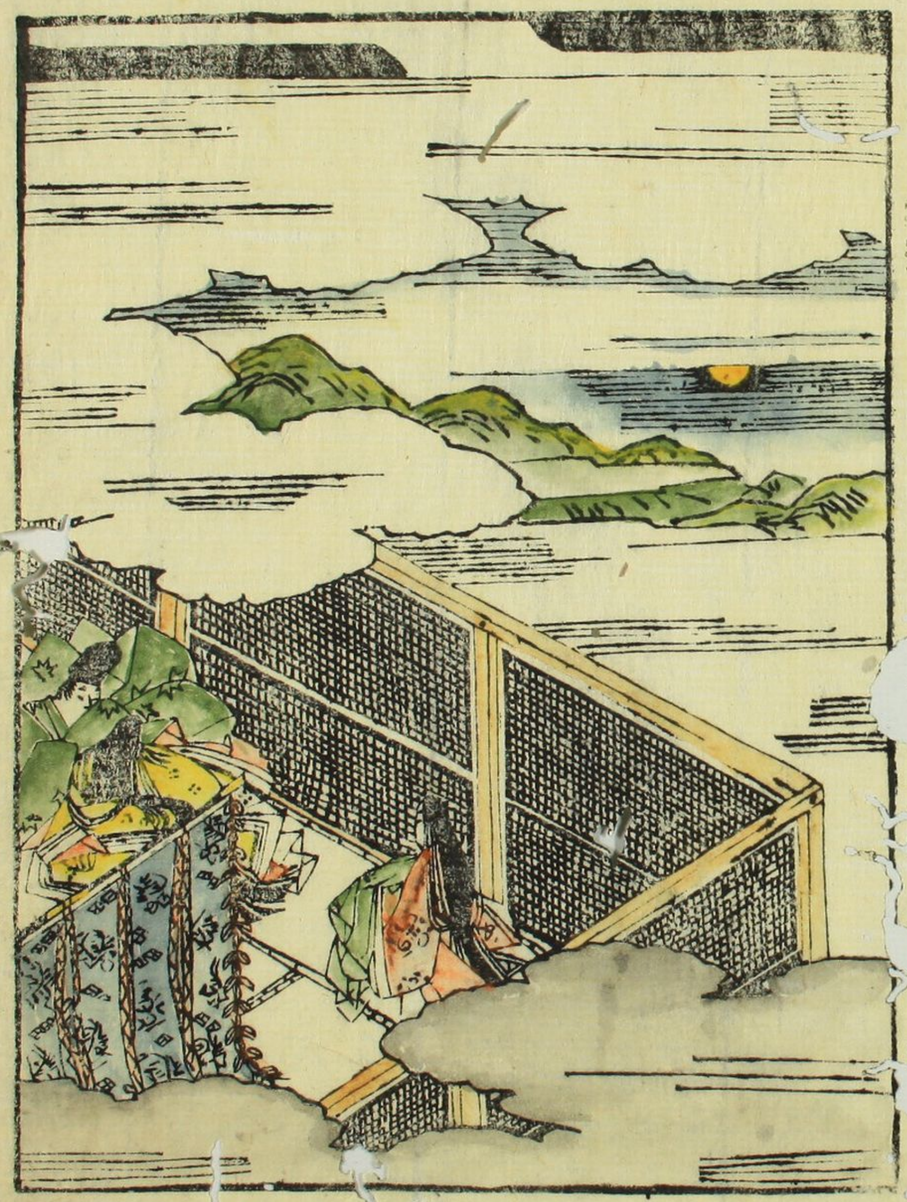
ひろけさんやうゝゆゝしくていとけたか
くいやらさるをさいつさのんさまのうち
はりたるさ海をとらうけよおひされゆ
うくこゆるくさ海をちひさちなつかの
かやくは乃文ようく似あるはなると海も
まはるも涙そおつるうをあくまちあり
てたてちすめれるれあせこのトよこめ所
ーをいわきうにうるとしいとうちおと
思てちかゝをとそこそ月れれといして立
てゆくハはひめ君のめれとる海へ尼君

いたやまをにくまうそよ袖うちをき
てうみわたりこしちやとのうしまへはなれす
人もついぬるかはかりはかうしをの道
うきふあるこをうしてぬとは何とも思はさて
すくるのよそうしいまふうしてあまの君
おいさんあるもしらぬうきなを
うしを家そきうしん京うきはすくぬうる
れたふ
うしの義はあいはをもうぬまふいう
てう為乃さうしんとすもとうふ海とをも
はるかうしをの人よ源氏
初春の義のうへをうつうしう
の紅もつゆうつはぬ花の君
花ゆこうしいうしの家けさをみ山乃
若(こけ)よくへさうしん 清花三昧おこうふ
滝(たき)の音にひくあいうち源氏

吹まよふみやまおろしよ夏さめてゐこ
ゝ
ゆきを流のをとうか 俤都
さうしみふ袖ゆ
ハさきやいもろ 俤都ハ
石のそこまくちわ
ア 浴源氏
文人よ切てゐこん山橋風ちゑ
ゆくもうゑく 俤都
うらんけの花ゆ
ゆ
ゆ

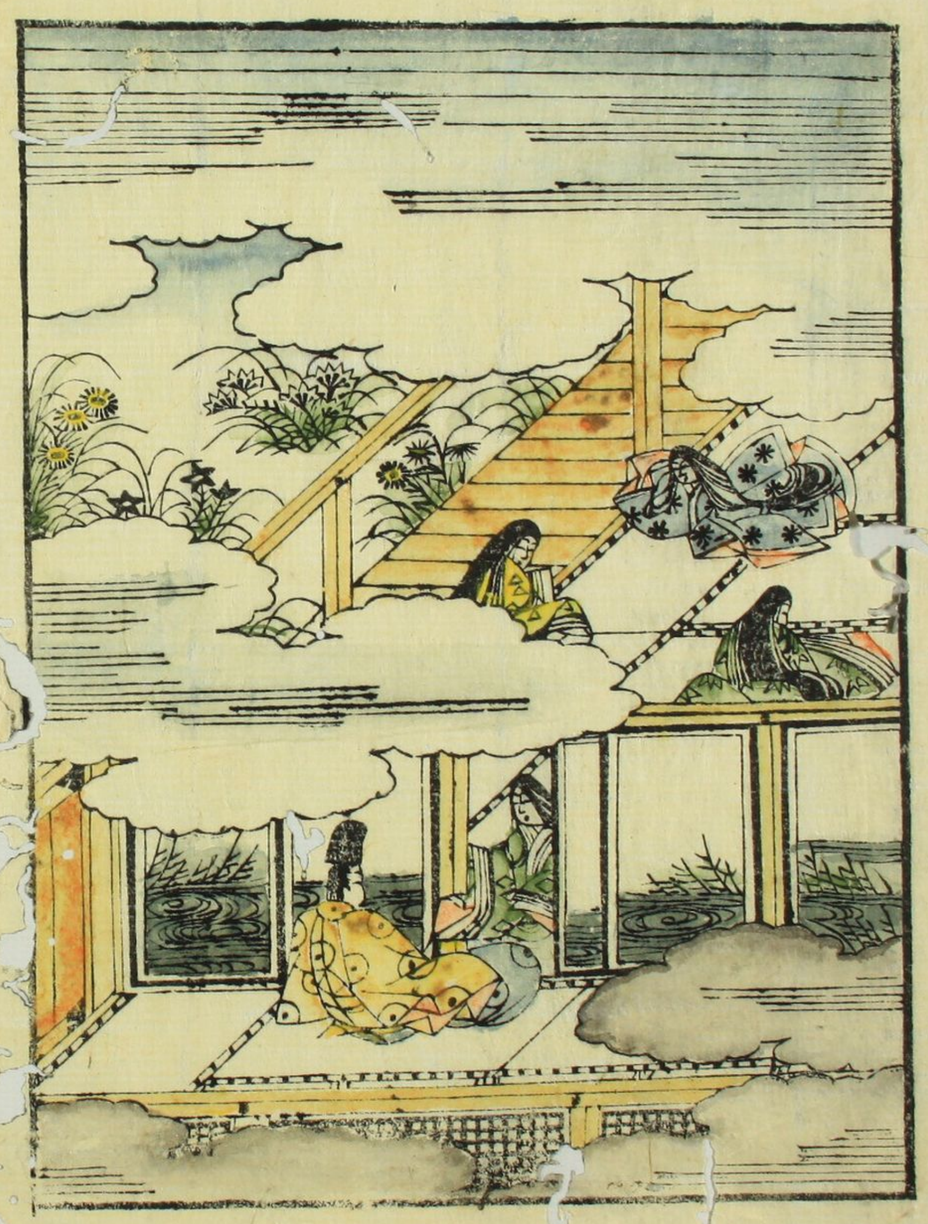
おく山乃松ゆ
ゆ花の
そゝ
なゆ
のゆ
へゆ
よゆ
ゆ
ゆ
ゆ

俤都をゆうく
ゆえ
ゆ
ゆ
ゆ
ゆ
ゆ
ゆ
ゆ



八庭のたちそまつふ伊在尼云

海とりや花のあるじハ立うきとうすもち
定乃中花をもうん京まわひむうの上
逢坂の上人あまうまりまつちをうを
の山ひまくさうくきゆゑ結ろいみつき
花の宮にもりゆ成をふまをまを
人こハくちゆ中ゆて宮ろれの吉ゆうよ
ちみゆ結おちくるれのゆくをゆをを
湖のゆとしれの中ゆをうなりけ歌
笛とゆ出く次ゆ歌ゆ月ゆう



源氏はまもなくかの山
のゐなをおくりに行ん
とのたまひてあちらに
ゐ給ひて御ぜんもすまして
又川のふうりうせいとうよりむまれた
ひとりかりものの花をさし海とてとりよせ
きとてめをとりのこひのみ世ばなしき人もを
ばハ元いろ紙にてくもの源氏の中ばし
なつけくハうき家とをきせてかつらたち
ちく京へおくりてもいとあり源氏
面白行ハ月紙しるるれを山さくら心乃

とまりとめてこうしう浦をあること

わしてはのへの乃橋ちぬまぬはしめ
なりなのたるさ二ちありてこれをふ
はうはなりゆくてのまいなとさわとふ
ひきこしにわうへとせまつることを侍れ
もかこまわかれは此君の母いは侍の川
めいをり西又ハ前つ月の月せんらいの武
蔵文ハ武蔵めせをふうて百蔵の
侍文ハ海ふく源氏

あさうゆあくも人とふねとこの井
のうををめうんわ山のたをうわひめ君
まうなにほをふつけ侍ぬとあるハいは
源氏まりくそのうをあまを
の君ハいろのくく
一をてくまを
ゆうてくやしとやし山乃井ハあ
きるうやけをうるへまはういまをおうあ
をハうをひき君ねるもとりを山ハ蔵
の女侍あやこ君ひくく海て四里とおハしり
源氏ハうやうのひまとあくれまを

はしたなくてはえ女房を命
ぜといふをせめあるきまいりたるに人
もなくて見えまゐりたるをうつも
なほ山ゆやしもとまゐ
しけるに 山こしふるゝ梅の山を
宿もとあるつきをぬさめぬと源氏
みくもえあまれ身のうらう
やてきまゐあるもとれとも世をうり給
もさしるいとくてなつか
世をうゐ人やつをんゆひくうり給
とさゐぬ変にをてもをうるあ給ま海
なるをくあるうけあ思いをとなの見
あるあ所たまゐ給あをとをていう
ゆくをひきてをつ身ゆまれを山
をへひきくをつれ給あをとうをの尼
を京乃ゆ墓へ命ゆ給つを推光ゆ世ハ
源氏をゆをりをゆ給ゆ尼
君ハ命いめん命 姫君けちふをうきん
しの君をうおりをれ見をのくゐ世なを
ゆをさなくをみ給人とのをうをゆをゐ

にきみかへり給ひし愛つかうし給源氏
いまけすきなれの上しるやうしよみ声
君にたけ世まれそえ給ぬ　むらさきの上のゆかりの
とくのこまもらひらて藤つぼの春し　東の御かた
なたくさあやうらをかしく

紫につけて見つもらむらさきの孫
まかりひ若紫への若葉北山へゆくきを
もひめ君とも紫と名付たりける
むらさきの一もとゆへにむさし野の草はみな
あはれとぞ見る　古今　紫のゆかりの御
めいまれは桜けのむらさきの上にてあま君
九月よりくれ給よりあはれなるひさに
きく給源氏

わかまた浦よりあひろもこゝうち
あきの給ふ六条わたしの納言君　むらさきの　ゆかりのかや
よ給の名も見て北のをりたまひ
なひら山なみきむ風吹あれたるよし
夜源氏むらさきの上にさ給ふてなつけ
かきひ給ひく夜ふけきあかりさえりかな
雨よ降るひつまの家あり門をたて世かな

よゆつきれいしゐあるへしてこそうるを
たまふ奇源氏
胡蝶を背ふ河竜はゆき
色うるはいもうつろふうらもあるを
はるへをうしてしてあ女　三尺
立ともわ嘉節の間うきれるうくハをの
とさしはうるわしもを神賞ふをして
はつてはるまつうる雷にうちのせくも
きれをゆるそうわ拾りはものも雲乃
君もうわへをうのあひるりはくいつか

ゑをとはるゆふはくまうるいうひ
つけ拾ふ源氏
移ハうをとはるれそうるむうを時のき
をふうるうを君はゆちを君うを拾へとの
拾へを拾きをけふをいきてうをそなをる
姫君
かうへまゆをうをハををるふいうを
源氏はゆちなるうんを拾ハはをとる
ふをうををきうをハはをる